

氏 名	ヤマ	ウチ	タカ	ヒロ
	山	内	貴	博
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）			
学 位 記 番 号	博 美 第 336 号			
学位授与年月日	平 成 23年 3 月 25日			
学位論文等題目	〈作品〉比較造型 三題			
	〈論文〉比較風景論			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教 授	（美術学部）	清 水 泰 博
（論文第 1 副査）	〃	〃	（ 〃 ）	野 口 昌 夫
（作品第 1 副査）	〃	准教授	（ 〃 ）	橋 本 和 幸
（副査）	〃	教 授	（ 〃 ）	元 倉 真 琴
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	尾 登 誠 一
（ 〃 ）	〃	准教授	（ 〃 ）	長 濱 雅 彦

（論文内容の要旨）

街の雰囲気のちがいは何か。雰囲気を感じるのは人であり、みている対象は街である。街の雰囲気
のちがいは何かという探求から始めた本研究は、場の固有性の論理を解明することを主な目的とする。
街の雰囲気は、場の個性や特徴といったその場に固有な性質、すなわち場の固有性のことと定義できる
ように思う。

筆者が生まれたのは京都だが、親の仕事の都合で東京と大阪で育ち、また親の実家が父は京都、母は
北九州のため、幼少年期に頻繁に里帰りをしていた。その中で、色々な風景に出会い生活したことで、
無意識に街の雰囲気のちがいをを感じるようになった。その後、設計の仕事にたずさわり、こうした街の
雰囲気のちがいをいかにしてデザインにまとうることができるのか考えるに至っている。

たとえば一つの型である住宅をみても、内的要因と外的要因によって成り立っているが、今日の住宅
では型の多くは内的要因に偏っている。内的要因には機能性や安全性、快適性、経済性があげられるが、
その型は、社会に受け入れられると一般に流通し量産（商品化）していく単体の論理であり、どの場所
にも類似した住宅が建てられる。それは押し進めると、無個性な繰り返しを生み、非人間的で均質化し
ていく。これとは逆に、外的要因で組み立てられる論理、すなわち場の固有性の論理を解明し、それによ
って型を変形する必要がある。とりわけ今日の量産型住宅の多くでは、アイレベルからみる心のまな
ざしが欠如している。この偏りは近代以降の工業生産時代の特徴とも言える。それ以前の工業技術が発
達していない太陽エネルギーのみで暮らしていた社会では、視覚など五感を通した思考が現在より鋭敏
であったと思われる。そうしたある意味厳しい自然環境でつくられた建物の集合は、自然と対峙し互い
に調和した地域固有な風景をかたちづくっていた。このことから現代の人々は、目の前にある風景を
あるがままに感じる姿勢を取り戻し、内的要因と外的要因とのバランスをとる必要がある。

本研究の概要と構成を以下に示す（図1）。

第1章「序章」は、研究の背景と目的、研究の位置づけについて述べる。また、研究の構成を示し、
次章に関連する既往研究を概観する。

第2章では、「場の固有性の捉え方」について論じる。まず、場の固有性の捉え方を図式化する。これ

はアイレベル的（表情的）と俯瞰的（機能的）、そして記憶的（歴史的）という三つの視点からなる。この三つの視点について、各々の位置づけを分析し、その内容を体系化する。次にこの三つの視点の中から、記憶的（歴史的）な視点に着目し、その内容がアイレベル的（表情的）と俯瞰的（機能的）という二つのタイプに分類できることを示す。これらの分析をもとに、場の固有性の捉え方の概念をまとめる。

第3章では、「場の固有性が生まれる要因」について論じる。まず、街を構成している構成要素に着目し、地形や方位など自然条件に影響を受ける状態を探る目的で街の調査を行った。調査方法は、2章での分析をもとに、俯瞰的な視点からの調査と、アイレベル的な視点からの調査の二つの方法に則っている。これらの調査から、記憶的（歴史的）な視点における二つのタイプ、強いエレメントと弱いエレメントを抽出する。さらに、強いエレメントで構成するマップと弱いエレメントで構成するモデルを制作し、そこに表れるエレメントの相互関係性から場の固有性が生まれる要因を分析する。結果として、俯瞰的（機能的）とアイレベル的（表情的）の両視点を結ぶ関係性としての原理が、空間的「抜け」にあることを提示する。また「抜け」が、気配がうかがえる程度に暈す（見え隠れさせる）必要があることを明示する。

第4章では、「場の固有性を生む方法」について論じる。特に、エレメントの強弱によって暈す「抜け方」について考察する。ここでは、「住宅の商品化」を取り上げ、それらが、「場の固有性」の対極に位置づけられると仮定し、「抜け」に着目した分析を行った。その上で「抜け方」には、強いエレメントと弱いエレメントの2つの傾向があることを示す。また、「住宅の商品化」のモデルを強いエレメントの傾向として例示し、エレメントの強弱の傾向のバランスを操作したモデル（住宅の提案）を立案する。結果として、場の固有性をうむ作法が「奥行きを発生させること、つまり狭さや近さに対し広がりや距離感を生み出すこと」にあることを示す。

第5章「結論」は、各章で得られた結果をまとめ、本研究で得られた知見を総括した。

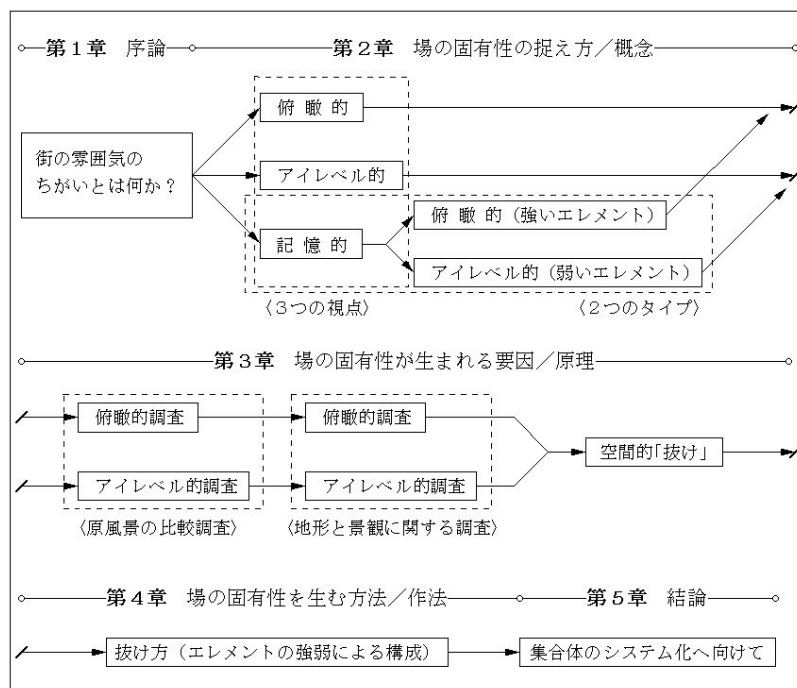


図1 研究の構成

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は5つの章からなり、第1章を「序論」、第5章を「結論」とし、その間の3つの章が論理的に展開されている。第2章の「場の固有性の捉え方／概念」では、街の雰囲気の違いを「俯瞰的」、「アイレベル的」、「記憶的」の3視点から論究し、「記憶的」をさらに「俯瞰的」と「アイレベル的」の2タイプに分けて分析し、場の固有性をどのようにして捉えるかを呈示している。「記憶的」を「歴史的」、「アイレベル的」を「表情的」、「俯瞰的」を「機能的」と読みかえることを示唆することで比較的、説得力のある仮説が述べられている。

第3章「場の固有性が生まれる要因／原理」では、第2章の仮説のもとに調査を開始し、街の構成要素に着目し、地形や方位などの自然条件との関係性を明らかにしようとしている。大きくは「俯瞰的調査」と「アイレベル的調査」を各々、原風景の比較、地形と景観の2段階で行い、その結果として空間的「抜け」という要因を発見している。この「抜け」は本論文を基底に制作された作品に直接的に反映されている。

第4章「場の固有性を生む方法／作法」では、エレメントの強弱による構成をもとに様々な「抜け方」を考察し住宅モデルの提案を行っている。またそれは集合体のシステム化へ向けた制作につながっていく。

以上、本論文は章を追って「概念」、「原理」、「作法」、「制作」と、明快な筋立てに沿って展開されたもので、主観に陥る面も散見されるものの、その独創的な視点と論理の組み立ては説得力があり魅力的である。風景論という、景観工学、環境心理学、認知科学など幅広い分野と関係をもつ難しいテーマに積極的に取り組んだ姿勢とその成果は高く評価できる。論文の審査としては合格とする。

(作品審査結果の要旨)

「街の雰囲気のちがいは何か」から始まった研究は現在の日本が抱える都市景観の問題点をあぶり出し顕在化させる事に他ならないだろう。システム化され個性を失っている住宅や街の風景、無秩序に乱立する都市のビル群。このままで日本の風景、街の風景、都市の風景というものはこれで良いのか。何を残すべきなのか問いかける優秀な作品である。

「街の雰囲気」を「場の固有性」のことに定義し、[場の固有性の論理]を解明するために三題の作品が発表された。各々の作品について審査結果を述べる事とする

一．原（都市）風景

【自体験からの四つの街での場の固有性をつくりだしているエレメントの考察とそのモデル化】については人がどのように場をとらえるか仮説を立て、アイレベル的視点、俯瞰的視点、記憶的視点の3つの視点からリサーチと考察を繰り返した結果から得たエレメントによって構成されるモデル化により場の固有性を検証し、その場の傾向から問題点を解決する事まで含めた提案になっている。重要なエレメントが抽出された4つの作品は「抜け」や「特別な視点場」が場の固有性が生まれる理由になっている事に着目しながら進め、自然の地形と造型物で構成されたアースアートのように、美しい風景を描く（造る）ためのクロッキー画のようでもあり、造型物として優れた作品である。しかしながら作品の表現は俯瞰的要素が強く、欲を言えば膨大なリサーチと考察を映像等でプラスすることで、よりわかりやすくなったのではないか。

二．現（都市）風景

【現在の白山から芸大までの都市空間における「抜け」空間の考察とそのモデル化】については

さらに直感的に表現しようとする試みである。抜けのキーワードになっている「五感」を触発させる無垢の木を彫り込む事で「抜け」空間の考察をモデル化したものである。より感覚的となって印象的になっている。

論文では特別な「抜け」とは、街が自然条件に影響を受けて生まれる外部空間の状態で、場の固有性が生まれる理由（原理）としている。また弱いエレメントである空間的な「抜け」が重要な働きであるとしている。しかしながら作品は白と黒の対比が強く、本来弱いエレメントの「抜け」部分の中間色が何らかの方法で表現されていたほうがわかりやすかったのではないかな。

三．住（建築）風景

【都市の風景をつくり出すエレメントである住宅のあり方の提案】については場の固有性を生む「抜け」とその作法である「暈かし」に着目しながら、都市の最小単位である住宅を考察する事で都市の風景を解決する事目指した意欲的な作品である。本人が論文中で述べているように「今日の住宅では型の多くは内的要因に偏っている。内的要因には機能性や安全性、快適性、経済性があげられるが、その型は、社会に受け入れられると一般に流通し量産（商品化）していく単体の論理であり、どの場所にも類似した住宅が建てられる。それは押し進めると、無個性な繰り返しを生み、非人間的で均質化していく。これとは逆に、外的要因で組み立てられる論理、すなわち場の固有性の論理を解明し、それによって型を変形する必要がある。」に基づいた住宅の立案である。「抜けと暈し」を追求した住宅提案と、従来の商品化に特化した住宅の例と並べての提案となっており、違いが明確にわかる優れた作品であった。しかしながらどちらのほうが良いか判断しろと言われた場合、むしろ商品化されているほうを選択してしまうのではないかなと思わせる。それは周辺の環境（道路や街の状況）が明快に表現されていなかった事と、モデル自体に「抜けと暈かし」を現代感覚に落とし込めていないのではないかなと感じた。昭和の木造住宅の意匠を少しアレンジした程度に見えてしまうのも少し残念である。また、形体だけがエレメントの要素になっているように思えた。材料の質感等が弱いエレメントとして風景に影響を与える事も今後の課題としてほしい。材料の時代性、気候の変化の対応など現在の環境からの提案にさらに発展する事を期待する。

作品総合評価

徹底した調査と考察に基づきながら提案された作品群はどれも理にかなった造型である。人に伝えるという点では検討の余地はあったが、今後の日本の都市、住宅のあり方を考える上で重要な研究作品であり、今後の展開も期待できる優れた作品である。適正な日本の都市創りのシステムとはなにか、本人が述べた「新たな集合体のシステム」へ発展を期待したい。

（総合審査結果の要旨）

山内貴博の論文及び作品は、長年本人の追いつけてきたテーマに対する2つの手法（論文化と作品化）による研究内容となっている。その研究内容は修士の学生時代からのテーマを押し進めたもので、はじめは自分に関わりのあった4つの都市（場所）の雰囲気の違いを比較研究することで、場の固有性とはどこからきているのかを論理づけようとしたものであった。当初はその場所の方位や傾斜・勾配、通りの見通し性などからの考察であったが、様々な調査・分析の結果、次第に論の中心となってくるのは「抜け」や「暈かし」といった概念である。更にそれぞれの空間での強いエレメント、弱いエレメントといった考えを導入している。これらは都市空間を「読む」という、今までの本研究の長い調査によって導かれた概念なのだが、そのことによって記憶に残る街の要素、また街の雰囲気をつくりだしているものが何なのかを考察している。また建築内部の吹抜けとアルコーブの概念が、そのまま都市空間にも

有効であることを示唆している部分は、空間がスケールを越えてフラクタルに展開していくことの重要性を示していて興味深い。

作品は論文にて提起したその概念によってつくられている。それは模型という表現形式を使った「概念の表象化」である。一つ目の作品は子供時代の記憶に残っている風景、いわゆる自身の原風景を今改めて分析し、論理的に考えると何だったのかを表現した「原（都市）風景」という模型。よくある都市空間を表した模型とはおよそ違い、都市空間の中で浮かび上がる要素だけを造形化したものだが、あたかも都市を詠んだ一編の詩のような作品になっている。二つ目の作品は人が現代の都市空間で、その場所を認識している風景の魅力は何なのかを現在の自分の馴染みのある場所を対象に「抜け」の概念から示した「現（都市）風景」という模型。これは上面を同一水平面とし、街路を掘り出して勾配などを表現している。白木と漆塗りの対比により都市模型が抽象化され、レリーフ状の水墨画のような作品となった。三つ目の作品は地域の固有性がなくなりつつある現代都市空間において、都市を構成する個々の建築で何が可能なのかを示した「住（都市）風景」である。ここでは現代の都市住宅によく見られる一室住居を採り上げ、それと対比させるために、弱い要素を付加し、「抜け」と「暈かし」の要素を加え、建築内部の吹抜けとアルコーブの概念を、都市を形成する建築外部空間をつくり出すためのデザインとして試みている。作品は以上の3部作であるが、単なる提案としての建築・都市模型ではなく、模型をメッセージ性のある美術作品に昇華しようとしたところを評価した。

以上のように山内は修士から博士へと一貫していたテーマを、論文、作品に表現したもので、共通して見られる研究・提案は、均質化し無味乾燥化していく現代都市が、昔の都市が持っていたような魅力を取り戻すための方策を様々な角度から探ったものと言えよう。全体として論文・作品が非常にうまく一体化された「風景」への研究として高く評価したい。